

令和7年度第1回企画展 国立劇場所蔵 上方浮世絵展 資料リスト・解説

会期 令和7年(2025)4月19日(土)～6月22日(日)

会場 国立劇場おきなわ 資料展示室

【凡例】

一、本展は、令和4～5年にかけて、国立劇場伝統芸能情報館及び国立文楽劇場で開催した「国立劇場所蔵 上方浮世絵展」を元に、再構成したものである。

一、展示作品のうち1～38、40は国立劇場所蔵、39、41～44は国立文楽劇場所蔵である。

一、本リストに記載した番号と、展示作品の下部に記している番号は一致している。

一、資料リストは次の順番で記している。ただし、版元については画面に記載がある場合のみ記した。

- ・作品番号
- ・作品名
- ・作者名(落款、印章【】、絵印【(絵)】・花押【花押】)
- ・判型・技法・頁数(寸法 縦×横 cm)
- ・制作・版行年 和暦(西暦)
- ・版元

一、漢字表記については、旧字は新字に、異体字や略字等は正字にしている。

一、各章解説および作品解説は北川博子(甲南女子大学非常勤講師)が担当した。

第一章 濃いめ！上方の役者絵

1

三代目中村歌右衛門の石川五右衛門、二代目嵐璃寛の近江ノ鮎売源五郎

絵師：重春(玉柳亭重春画)、国広(歌川国広画)

形状：大判錦絵二枚続(37.5×25.0、37.5×25.7)

版元：天満屋喜兵衛

上演：文政13年(1830)1月

大坂角の芝居「けいせい雪月花」

歌右衛門と先代璃寛(初代嵐橘三郎)は文化文政期を代表する役者として人気を二分していたが、長らく共演することがないまま橘三郎が文政4年に亡くなった。歌右衛門は翌年の二代目橘三郎(璃寛)襲名に尽力するが、同12年7月まで、この二人が共演することはなかった。本作はその二人が初めて二の替興行で共演したときの役者絵である。重春と師の国広による合作で、月夜の中で対峙する二人からは、華やかともいえる意気地が見て取れる。

2

二代目嵐璃寛の宮本友治郎、三代目嵐徳三郎の傾城むさしの

絵師：北英(春江斎北英画)

形状：大判錦絵二枚続(38.2×26.4、38.0×26.0)

版元：本屋清七

上演：天保3年(1832)1月

大坂筑後芝居「復讐二島英勇記」

巖流島での宮本武蔵と佐々木小次郎との決闘を敵討に変えているが、直接は享和3年(1803)序の読本『絵本二島英勇記』に基づいており、上方では人気の演目であった。友治郎は後に無三四(武蔵)となる主人公で、立廻りをしながら、むさしのが見せる手紙を読む、という場面である。背景は黄一色の、いわゆる「黄潰し」といわれる技法であるが、上からつるされ

た花の色と相まって、躍動感あふれる場面に華やかな雰囲気醸し出されている。

3

二代目中村富十郎の娘おたき、二代目片岡我童の鮎屋源五良

絵師：初代貞信(長谷川貞信画)

形状：大判錦絵二枚続(38.0×26.0、38.2×26.3)

版元：本屋清七

上演：天保 10 年(1839)1 月

大坂角の芝居「けいせい^{はまの まさこ}浜 真砂」

天保 10 年代になると大坂の錦絵はより濃厚な色彩になっていく。その頃最も活躍した絵師が初代貞信であった。それまでの上方の絵師よりも、すらりとした姿態の役者絵を残している。本作は源五郎が偽の婿を頼まれ、おたきと見合いをする場面を描いている。実情を知らぬおたきは、源五郎を見て恥ずかしがるのであった。我童としての代数は二代目であるが、将来片岡仁左衛門を襲名することが既定路線となっていたための「八代目」表記であろう。

4

三代目嵐璃寛の二代の尾上と初代大川橋蔵の岩藤亡霊

絵師：広貞(広貞【貞】)

形状：横中判錦絵一枚(25.0×18.3)

上演：嘉永 2 年(1849)1 月

大坂角の芝居「^{おの えいゆふじ こじつばなし}尾上岩藤後日話」

天保の改革により役者絵の版行が約 5 年間停止された後、大坂では大判の半分の大きさである中判で再開される。この時期、浮世絵作品を一手に引き受けていたのが広貞であった。画面左下に「五」とあるのが組物の一枚かと思われるが、他の作品については不明である。中判という狭い空間に二人の役者の半

身像を描いているが、背景のぼかし、左上の金銀の蝶、岩藤の衣裳に使われる金の絵の具など、彫りと摺りの技術の高さが見て取れる逸品である。

5

四代目中村歌右衛門の団七ノ茂兵衛と二代目中山南枝の岩井風呂富

絵師：広貞(広貞【小西五長】)

形状：横中判錦絵一枚(24.9×18.0)

版元：金花堂小西

上演：嘉永 4 年(1851)5 月

大坂中の芝居「^{やどなしだんしちしぐれのからかさ}宿無団七時雨傘」

大坂島之内の置屋岩井風呂で起こった殺傷事件を、事件後すぐに作者並木正三が歌舞伎に仕立てた。正三の名をそのまま役名として、主人公茂兵衛に意見する人物にするなど珍しい芝居で、上方ではしばしば上演された。愛する茂兵衛のため偽りの縁切りをする富を憎んで逆上し、茂兵衛は置屋主人や恋敵らを殺害するのである。本作は刀を振り回す殺気だった茂兵衛と富が描かれ、豪華な衣裳ではないが、刀や富の帯の模様に使われた絵の具が目を引く。

6

二代目嵐璃瑠の奴いつ平、二代目尾上多見蔵の馬士江戸兵衛、三代目嵐吉三郎の馬士八造

絵師：国員(国員【国員】)

形状：中判錦絵三枚続(24.3×18.7、24.4×19.0、24.4×19.3)

版元：石川和助

上演：安政 4 年(1857)8 月

大坂中の芝居「^{こいによぼうそめわけ たづな}千金手綱恋染込」

人気の「^{こいによぼうそめわけ たづな}恋女房染分手綱」の改作物の歌舞伎である。雪の中での人気役者三人による立廻りは見応えがあったようで、役者評判記『^{やくしゃわたりそめ}役者初渡橋』の三人の芸評は、いずれもこの場を賞賛している。画面の背景も漆黒の闇がぼかしとなっており、雪は激しさが感じら

れる大きさと形である。奴や馬士という、決して裕福ではない人々が下に着ている着物の柄に、金の絵の具が使われている。躍動感あふれる画面に、彫りや摺りの細かな職人技が見て取れる。

7

五代目三橋大五郎の笠原・市川助蔵の本曾ノ童子、初代市川右団治の無三四

絵師：広信（広信、広信画）

形状：中判錦絵二枚続（26.0×18.6、25.9×18.4）

上演：明治3年（1870）3月

大阪角の芝居「敵討巖流島」

巖流島での決闘を敵討に仕立てた読本『絵本二島^{えほんにとう}英^{えい}勇^{ゆう}記^き』の巻七を下敷きにした場である。父の敵討のために武者修行の旅を続ける無三四が、雪の中で一夜の宿を頼んだのが笠原老人の家であった。本作は無三四が笠原宅を訪ねてきたところで、画面に描かれた台帳には、二人の台詞が記載されている。この後、笠原が武術の達人であることがわかって、無三四は修行に励むのであった。背景の細かな描写とともに、三人の衣裳の柄と絵の具が際立つ。

8

初代実川延若の横蔵、三代目中村翫雀の慈悲蔵

絵師：芳滝（芳滝画）

形状：中判錦絵二枚続（26.1×18.8、26.2×18.7）

上演：明治3年（1870）10月

大阪筑後芝居「本朝^{ほんちゆう}廿四孝^{にじゅうしこう}」

『二十四孝^{にじゅうしこう}』とは中国元の時代に編纂された、優れた孝行者二十四人を取り上げた書で、この場は、母のため冬に笥掘りをする「孟宗」を下敷きにしている。軍師山本勘助の後家越路は孝行息子である弟の慈悲蔵には辛く当たり、横道者の兄横蔵を甘やかしている。慈悲蔵が母のために笥を掘っていると横蔵が現れ

争いとなる。この二人、実は兄弟ではなく、この後、長尾家と武田家に分かれていく。二人の衣裳には金銀の絵の具が使われ、色の対比も美しい。

9

初代実川延若の綱よし公、三代目中村福助のおさめノ方

絵師：茂広（柳桜茂広【花押】）

形状：中判錦絵二枚続（24.7×17.3、24.7×17.4）

版元：玉ノ井

上演：明治9年（1876）9月

大阪戎座「護国婦女太平記^{こくおんなたいへいき}」

筑後芝居から戎座へ改称した開場興行で、画面左上の賛「戎座やよき琴の音の調より 来る見ぶつは大入の秋 玉園」はそれを祝うものである。柳沢騒動を素材にした同名の実録体小説を元にした歌舞伎である。柳沢吉保の側室おさめは元五代將軍綱吉の愛妾で、綱吉はおさめが産んだ子を我が子と信じて六代將軍にしようとしたため、正室に殺されたという俗説による。延若が綱吉と吉保の二役を演じた。赤が目鮮やかな新時代の大首絵の秀作である。

第二章 推しの役者たち

10

三代目中村歌右衛門の当り振舞之図

絵師：芝国（西光亭芝国画）

形状：大判錦絵一枚（37.8×26.3）

版元：有原堂忠兵衛

作成：文政7年（1824）5月頃

歌右衛門自身の賛「乱菊に星の隠るゝ垣ねかな 芝翫」と絵師芝国の活躍期から、本作が文政7年5月、大坂堀江芝居の「芦屋道満大内鑑^{あしや どうまん おおうちかがみ}」道行^{みちゆき}「恩愛^{おんあい}の乱菊^{みだれぎく}」の当振舞であることがわかる。「当振舞」とは劇場が大入になったことを祝し、興行主が役者をもて

なすことで、この時は天下茶屋にあった松幸の座敷で行われた。当振舞の様子はもちろん、役者のこうした姿を描く役者絵は大変珍しい。最辰たちも本作で祝いの雰囲気味わったのであろう。

11

初代市川鰍十郎の歳旦

絵師：玉国(玉国画)
形状：大判錦絵一枚(37.6×24.7)
版行：文政5年(1822)1月頃

お供の者を連れ、袴の正装で歩いているのは、前年の顔見世に江戸から戻ってきた鰍十郎である。歌舞伎役者は正月、最辰筋を訪れて新年の挨拶を申し述べた。そして、新年を祝う歳旦句を詠むのである。この絵を描いた玉国は寿好堂よし国門下の寡作絵師で、同門の峰国が「元旦やさればあづまのものかたり」の句を、師のよし国が「日のひかり海老にいます今朝の春」の句を寄せる。販売用の商品というより、最辰に配布される摺物的な役者絵である。

12

初代中村歌六の座付引合

絵師：北英(春江斎北英画)
形状：大判錦絵一枚(37.3×25.7)
版元：本屋清七
上演：天保3年(1832)11月
大坂中の芝居「座付引合」

座付引合とは、他の地域からやってきた新参の役者を最辰連中が紹介する、上方の顔見世ならではの行事である。最辰連中たちは舞台前方の席を独占し、座付引合の時には舞台に上って役者たちを紹介するとともに、自らの芸をも披露したのであった。本作は最辰連中の一つである花王連中が、5年ぶりに江戸から戻ってきた歌六に行った座付引合である。最辰連中

は拍子木を叩きながら、自ら唄を歌うのである。その歌詞が歌六の上部に記載されている。

13

俳優楽屋影評判 二代目坂東寿三郎

絵師：二代貞信(応需貞信【貞】【信】)
形状：大判錦絵一枚(38.1×24.8)
版元：小野豊治郎
版行：明治17年(1884)

東京の豊原国周が明治16年に手掛けた組物「^{がく}楽屋二階影評判」の趣向をそのまま取り入れた作品である。少し開いている楽屋の障子から、鏡に向かい舞台化粧を施す寿三郎の様子が見えているが、歌舞伎では役者が自分で化粧を施すのが通例である。奥には招き猫が鎮座する神棚と堂島の最辰から届いた進上品である米百俵の貼り紙が見える。右側に影として映る人物は、手に拍子木を持っている。寿三郎に開演の時刻を告げに来ているのかもしれない。

14

三代目中村翫雀、四代目嵐璃寛、二代目尾上多見蔵の口上

絵師：芳滝(著佐々木芳滝)
形状：中判錦絵三枚(25.9×19.0、25.8×19.1、25.9×18.9)
版元：池田伝兵衛
上演：明治9年(1876)3月
大阪松島座「口上」

松島座は木津川と尻無川に挟まれた川口を開発した新地に作られた新しい時代の劇場であった。上方歌舞伎界の重鎮である多見蔵が、最辰からの要望に応じて座頭を勤めさせる璃寛と、東京から下ってきた翫雀を御目見得として引き合わせる口上である。翫雀の口上は名前にちなみ「雀づくし」となっていて、故郷大阪へ戻った喜びを表している。璃寛の口上は、再

三断ってきた座頭を受けることとなったため、今後の御最辰を願うものになっている。

15

三代目中村大吉と四代目中村仲蔵の名開摺物

絵師：広貞（五粽亭広貞【五粽亭】）
形状：大奉書錦絵一枚（37.4×49.7）
版行：弘化 5 年（1848）正月頃

大吉がもとの名跡に戻ることに、大坂系の仲蔵の襲名を記念した摺物で、最辰への配り物として作成された。^{なびき}名開を世話した富十郎（慶子）、大吉と仲蔵、名古屋興行界の大物中村津多右衛門、門弟たち、そして江戸の七代目市川団十郎（白猿）が賛を寄せる。「^{たかさご}高砂」を歌舞伎の舞台に写す趣向であるが、尉と姥の顔は名開の二人に合わせて若く描かれている。ちなみに富十郎と団十郎はこの時、天保の改革でそれぞれ大坂と江戸を追放中の身であった。

16

初代三枳稲丸の死絵

絵師：猿雀（猿雀）
形状：中判錦絵一枚（24.5×17.4）
版行：安政 5 年（1858）4 月頃

稲丸は嘉永 3 年（1850）頃、京都の小判墨摺役者絵に数多く描かれていた。京都で活躍することが多かったようで、亡くなる直前にも四条南側芝居の「江戸仕入 俠 ^{えとし}安売」に出勤しており、その姿での死絵が二種確認できる。大坂の錦絵に描かれることは少なかったが、死絵はこの作品を含め四種確認できる。将来を嘱望されていた役者だったのであろう。猿雀は二代目市川米蔵をよく描く絵師として海外で評価が高い。稲丸は米蔵との共演も多かった。

第三章 動く舞台・魅せる演出

17

三代目中村松江のおかる、二代目嵐璃寛の寺岡平右衛門

絵師：北英（春江斎北英画）
形状：大判錦絵二枚続（38.4×27.0、38.6×26.9）
版元：本屋清七
上演：天保 2 年（1831）11 月
京都四条北側芝居「^{かなでほんちゆうしんぐら}仮名手本忠臣蔵」

現在でも頻繁に上演される七段目。祇園一力で偽りの遊興に耽る大星由良之助の密書を、遊女お軽がふとしたことから読んでしまう。そのことを知ったお軽の兄の平右衛門は妹を殺そうとする。この場では使用されないが、画面には「廻り道具（廻り舞台）」が描かれている。舞台の床面を円形に切った盆を造り、舞台下で心棒を人力によって回す装置である。宝暦 8 年（1758）12 月、大坂角の芝居上演の「^{さんじつこくよぶねのはじまり}三拾石 艦 始」で世界で初めて用いられた。

18

初代実川延三郎のさゝら三八、三代目藤川友吉のけいせい乙女、二代目尾上多見蔵のとらや金助

絵師：芳滝（芳滝筆、芳滝画）
形状：中判錦絵三枚続（24.4×17.7、24.2×17.0、24.4×17.6）
上演：文久 2 年（1862）閏 8 月
大坂中の芝居「^{けいせいあまのはごろも}契情 天羽衣」

大坂では繰り返し上演される演目であったが、描かれた「茶屋場」はこのとき大昔の仕内を増補したものという。三八は舞台で枝折戸から揚屋である虎屋へ入る所である。傾城乙女とともに、前には提灯を持つ男衆と禿、後方から傘を差し掛ける男衆が描かれ、花道で太夫道中が演じられていたことがわかる。最後は揚屋亭主の金助の立廻りである。舞台と花道を上手側から、演技に見入る観客たちの様子も含め写實的に

描き込んだ珍しい作品である。

19

三代目嵐璃寛の柳ノ精おりう

絵師：芳滝（芳滝画）

形状：中判錦絵一枚（26.2×19.8）

上演：文久元年（1861）8月

大坂角の芝居「色競九重錦」
いろくらべこのえにしき

「五色の内 青」とある五色とは、中国古代の五行説の青、黄、赤、白、黒を指す。組物として作成されたようだが、黄と赤は未見で、同年8月上演の歌舞伎に取材した「五色之内 白 傲華雪菊水 民部之助正悦」と「五色の内 黒 華楓浪速賑 古手屋八郎兵へ」を確認している。実は柳の精であるお柳は、命の恩人の横曾根平太郎との間には子まで成したが、やがて悲しい別れとなる。本作は別れの場面で、柳の葉がお柳の本性を現しているのである。

20

四代目嵐璃寛のこしもお菊

絵師：芳滝（芳滝）

形状：中判錦絵二枚続の内二枚目（26.0×19.2）

上演：慶応3年（1867）8月

大坂中の芝居「播州皿屋舗」
ばんしゅうさらやしき

本来二枚続で、右には「播州さらやしき 船越三平 中むら駒之助」がある。青山鉄山は姫路城主となるため若殿毒殺の謀議をするが、その委細を腰元お菊に聞かれてしまう。鉄山はお菊が扱う唐絵の皿の一枚を隠し、その紛失の咎を責め、お菊を切り捨て井戸に投じた。すると、井戸からお菊の死霊が現れ、鉄山を悩ます。本作は現場に駆けつけた夫の三平がお菊の霊から話を聞いている場面で、この後に三平は無事皿を取り戻すことができたのである。

21

中村宗十郎の大宅五郎光国

絵師：芳滝（応需芳滝画、芳滝画）

形状：中判錦絵二枚続（26.0×19.7、25.9×19.5）

版元：石川和助

彫師：砂越佐吉

摺師：ハザマ栄吉

上演：明治4年（1871）7月

大阪筑後芝居「相馬太郎 拳文談」
そうま たろうばえふだん

宝暦4年（1754）に人形浄瑠璃として初演されたが、文化3年（1806）に江戸で刊行された山東京伝著の読本『善知安方忠義伝』の影響を受けて、見せ場たっぷりの歌舞伎として上方で上演を繰り返した。妖術使いとなった平将門の遺児、滝夜叉姫と良門の姉妹の成敗を命じられた光国が戦う相手は、読本では数百の骸骨であるが、本作では多くの幽霊となっている。人間が演じる幽霊だけでなく、人形も使う演出が取られたのではないだろうか。

22

二代目嵐璃珪のふせ姫、三代目嵐璃寛の金丸大助

絵師：国員（国員【国員】）

形状：中判錦絵二枚続（24.7×18.4、24.8×19.0）

上演：安政4年（1857）1月

大坂角の芝居「けいせい 八花魁」
やつのなふさ

江戸の曲亭馬琴による『南総里見八犬伝』は文化11年（1814）から天保13年（1842）まで刊行された長編読本であるが、刊行中から上方で上演されて人気の演目となった。安房国の里見義実が落城を前に飼犬である八房に言った「敵の首を取ってきたら娘伏姫を与える」との言葉に従い、八房は敵の首を取ってくる。ここから八犬士の物語が始まるのであるが、本作は伏姫に添う八房が、一目瞭然と着ぐるみであることがわかるように描かれている。

吉田千四の望月源蔵と谷沢たのも

絵師：北松（春頂齋北松【北松】）

形状：大判錦絵一枚（37.1×25.6）

版元：利倉屋新兵衛

上演：文政 7 年（1824）8 月

大坂荒木芝居「^{かがみ}加々見山廓^{やまさとのききがき}写本」

18 世紀中期に加賀藩で起こったお家騒動は、実録体小説を経て、歌舞伎や浄瑠璃に取り入れられた。本作の人形浄瑠璃の役割番付は「千四」は「扇四」表記になっていて、「辻堂のだん」には「この所二やく早替りにて吉田扇四相つとめ申候」と説明されている。役割番付ではこの段以前も「筑間川の段」「おく庭亀の段」で千四が水中早替りを勤めたことが記されている。千四の早替りが演出の眼目となっていたことが役割番付と本作から理解できる。

第四章 カタチでたどる

四代目坂東彦三郎の口上

絵師：北洲（春好齋北洲画【よしのやま】）

形状：大判錦絵一枚（38.7×26.3）

版元：本屋清七

彫師：加助

上演：文政 13 年（1830）1 月

大坂角の芝居「口上」

文化文政期の上方で第一の絵師、北洲による口上図である。役者の口上図は刀と扇子を置き、袷姿で描かれるのが定型で、本作のように口上文が掲載されている作品も多い。彦三郎は江戸の役者で、前年 11 月に四代目を襲名したばかりであった。口上では、養父の三代目が以前大坂で「^{すがわらでんじゅてならい}菅原伝授手習鑑」の菅丞相を一世一代で勤めたことへのお礼や、二代目岩井衆三郎と同座する予定が急遽変更になったこと

などを説明した上で、ご最良お取立を願っている。

初代百村百太郎の死絵

絵師：よし国（よし国画）

形状：大判錦絵一枚（37.5×25.6）

版元：本屋清七、吉

版行：文政 6 年（1823）7 月頃

面長の輪郭につり上がった眉と目、高い鼻、大きな口といった特徴的な容貌を持つ百太郎は、^{ちゅう}中芝居で人気を得て、旅芝居先の明石の舞台を最後に 30 歳という若さで亡くなった。本図は死絵^{しにえ}の定型図で、浅黄色の袷に、左手に数珠、右手に蓮が生けてある水桶を持つ姿で描かれている。「文政六未年七月二日終」「黄泉名 真覚虎青信士」「俳名 虎青」「行年三十才」、辞世の句「おもわずも日影を歩ふ夏の旅 虎青」と、死絵の基本情報が記載されている。

初代尾上多見丸の死絵

絵師：茂広（茂広写）

形状：中判錦絵一枚（25.4×17.6）

版行：明治 6 年（1873）8 月頃

多見丸は役者絵にほとんど描かれることがなかった 19 歳の役者であるにもかかわらず、死絵^{しにえ}が出されているのが興味深い。25 の百太郎とほぼ同じ、定型の姿である。この年から太陽暦になり、現在の時刻制度が定められたため「午後一時」といった時刻表記である。戒名は「民進院自得日終信士」、寺は「八丁目寺町 本照寺」、辞世の句は「ほめられた柳もちるや寺の門」で、「美濃国ぎふにて往生」から旅先の岐阜での急死であることがわかる。

二代目片岡我童の死絵大津ゑぶし

絵師：未詳（無款）

作者：合ノ亭哥鳴

形状：横中判錦絵一枚（18.8×24.8）

版行：文久3年（1863）2月頃

哥鳴^{かめい}は多くの大津絵節を作詞しており、こうした一枚摺が多く残っている。「文久三亥二月十五日丑時」「さいご行年五十三才」「南松院春雲我燕信士」とあり、我童^{しにえ}の死絵にもなっている。歌詞の冒頭「田葉こやの三吉も。三ツのひやうしとならずして」とあるのは、我童が1月の角の芝居「けいせい 総^{たづな}神事」で主人公三吉を演じたことによる。雪の中、三吉が傘を差しながら恋い焦がれる娘の家へ訪ねる場面の大道具と小道具が絵として描かれている。

道頓堀顔見世・劇場解説図

絵師：未詳（無款）

形状：大奉書錦絵一枚（38.3×51.0）

版行：安政（1854～60）頃

中央に最辰連中「大手」「笹瀬」の標章が染められた幕が閉まる舞台があり、ここを左右に開けると「曾我の対面」の舞台が出現する仕掛けとなっている。周辺の升目に顔見世の劇場内外の様子を解説している。上から二段目の右から二つ目に描かれた「上棧敷」には「中村玉七丈江」「中村翫雀丈江」とあり、この二人が盛んに共演していたのが安政期である。大坂における顔見世興行の劇場内外の賑わい、舞台機構、役者や観客の様子がわかる興味深い作品である。

三都役者顔見世座附引合之図

絵師：富雪（富雪画）

形状：大奉書錦絵一枚（37.5×52.5）

版行：安政4年（1857）11月頃

画面中央には顔見世に行われる座付引合^{ざつきひきあわせ}が描かれている。平身低頭の女方が最辰連中によって観客に引き合わされる役者で、頭巾の標章から、向かって右側に立つ二人と舞台前面に座っているのは笹瀬連中、左側に立つ三人が花王連中^{きくら}であることがわかる。舞台図を三都の役者名が取り囲んでいるが、安政4年11月11日没の三代目中村大吉の名が見えず、同5年4月没の初代三掛稲丸の名があることから、本作は大吉が没した直後の版行と考えられる。

大新板 接合北国梅 加々見山旧錦絵飛廻双六

絵師：米広（米広画）

形状：小奉書合羽摺一枚（33.0×42.2）

版元：墨屋小兵衛

上演：嘉永5年（1852）11月

京都四条南側芝居「接合^{つぎあわせ}北国梅」、
「太平記忠臣講釈」、
「本朝廿四孝^{ほんちようにじゅうしこう}」

顔見世の前狂言「接合北国梅」、後狂言「太平記忠臣講釈」、切狂言「本朝廿四孝」の場面が描かれている。各場面には、「大序はじまり」（ふりはじめ）の「岩ふじ 大五郎」や「上り」の「八重垣ひめ なんし」など、このときの配役が適宜記されている。江戸時代後期には、京都の顔見世興行に取材した飛び廻り双六が京都の版元から出されていた。現存率が低く、保存状態も悪いものが多い。本作のように絵の具が色鮮やかに残っている作品は珍しい。

立版古「大新板先代はぎ切組灯籠」

絵師：二代貞信（長谷川二代貞信画）

形状：大判錦絵三枚組（37.8×25.1、38.0×25.3、37.7×25.2）

版元：富士屋政七

版行：明治 24 年(1891)3 月

浮世絵を切り抜いて裏打ちを施しながら立体的に組み立てていく立版古^{たてばんこ}は、江戸時代後期から版行されていたおもちゃ絵で、消耗品であることから現存率は極めて低い。その中であって、明治における二代貞信の立版古は群を抜いて現存している。画面を見ていくと、のりしろの部分なども立体的にくみ上げられるよう工夫されていることがわかる。「伽羅先代萩^{めいぼくせんたいはぎ}」は名場面の多い歌舞伎で、一つの立版古でそれらを多方面から見られるようになっている。

第五章 歌舞伎の文明開化

32

二代目尾上多賀之丞の小ざくら姫、初代市川右団治の志賀之助

絵師：芳滝（芳滝筆【花押】、芳滝画【花押】）

形状：中判錦絵二枚続(24.3×16.7、24.3×17.7)

上演：明治 9 年(1876)11 月

大阪角の芝居「新舞台清水群参^{しんぶたいきよみずもうで}」

清玄桜姫物の世界における「鯉つかみの場」を描いた作品である。「鯉つかみ」とは、主人公が鯉の精と水中で格闘する様子を見せる演出であり、舞台一面にたたえた本水を使うため、夏狂言で行われることが多かった。この作品における志賀之助の鯉つかみは、ケレンを得意とした右団治のあたり芸となり、息子の二代目にも伝わった。明治になると輸入の絵の具が流行し、さらに金銀の絵の具の使用もあって本作のように色彩が際立つ「赤絵」が生み出された。

33

道頓堀角劇場繁栄之図

絵師：二代貞信（応需貞信）

形状：大判錦絵四枚続(35.7×23.5、35.8×23.9、35.9×23.9、

35.9×23.8)

版元：本屋清七

版行：明治 17 年(1884)3 月頃

道頓堀の太左衛門橋斜向かいにあった「角の芝居」は、浮世絵にもしばしば描かれる大阪の名所で、明治期には「角劇場」と呼ばれるようになった。角劇場は東京の新富座を模して西洋風に改築され、明治 17 年 3 月 17 日に披露式が開催された。本作はその頃の様子を描いたものである。画面左上には「大工方棟梁府下 谷川清兵衛」と大工の名も記されている。劇場正面上部に、各場面を描いた絵看板をずらりと並べるのが近代の京阪様式である。

34

錦画百事新聞第三号

絵師：二代貞信（長谷川貞信画）

編集：友鳴吉兵衛

形状：横中判錦絵一枚(18.8×25.2)

印刷：前田善次郎

版元：前田武八郎

版行：明治 8 年(1875)10 月

錦絵新聞とは錦絵にニュース性に富んだ記事が載る新しい時代の出版物であったが、記事の部分は報道というよりも戯作に近いものであった。「錦画百事新聞」は大阪で最も多くの号が出されていて、190 号まで確認できる。本作は、脱疽で両手両足を切断した美貌の女方三代目沢村田之助が東京から下り、中の芝居「明烏露濡衣^{あけがらすつゆのぬれぎぬ}」で浦里を演じたことを報じている。手足のない田之助を支えた黒衣たち三人も描かれ、記事には「日々の大入」とある。

35

新聞図会第七号

絵師：二代貞信（小信改二代貞信画）

記事：舟木翁都鳥

形状:中判錦絵一枚(24.4×17.4)

版元:八百屋善助

版行:明治 8 年(1875)頃

絵師の貞信は明治 8 年に二代目を襲名するので、本作もその頃の版行であろう。「新聞図会」は貞信の他に、芳滝、芳光、雷斎などの絵師が手掛けていて、29 号まで確認されている。記事冒頭に「此頃大阪にて元能役者なりし某なる者 一派の演劇を開きて曾我狂言を興行する」とあり、図のような芝居が演じられていたことがわかる。能役者といっても「堀井仙助」は寛政年間(1789～1801)に路上で演じられる辻能を始めたと言われる人物で、その流れを謳っている。

36

初代市川右団次の大伴若菜姫、四代目中村駒之助の青柳春之助実は七草四郎

絵師:芳滝(芳滝筆)

形状:中判縦横四枚続(24.6×17.9、24.6×17.7、25.1×17.8、25.1×18.6)

上演:明治 7 年(1874)11 月

大阪角の芝居「四季模様白縫譚」

『白縫譚』は嘉永 2 年(1849)から明治 18 年にかけて刊行された、合巻中最も長編で人気の作品であった。江戸で出版された合巻であったが、大坂でも安政 3 年(1856)1 月、角の芝居で「けいせい白縫譚」として上演されている。本作は新しい時代らしく、「SIRANUHI」と染められた旗を掲げ、気球で飛んでいく様子が描かれている。右団次は大阪でケレンを得意とした役者であり、こうした大がかりな演出が人気を呼んだのであろう。

37

初代市川右団次の夢想兵衛、初代市川右団次のおたか、四代目中村駒之助の通弁、二代目尾上多賀

之丞の菊女

絵師:二代貞信(貞信画)

形状:中判縦横四枚続(26.0×18.8、26.2×18.9、25.8×18.9、26.2×18.9)

版元:玉ノ井

上演:明治 11 年(1878)3 月

大阪角の芝居「胡蝶戯洋行」

明治期には西洋を素材にした歌舞伎も盛んに作られた。このときの絵尽しによると、最初の「大日本の場合」で、大きな鳥に乗った夢想兵衛が地球儀から飛び出し、以降、「仏蘭西」「志那」「印度」と世界を巡る物語であることがわかる。本作は「仏蘭西の場合」で、洋装の菊女や通辞など、海外を想起させる舞台となっている。右団次は夢想兵衛とおたかの二役を演じているが、大きな鳥に乗っての宙づりは、ケレンを得意とした右団次の見せ場となった。

38

艶翠廓の松島

絵師:芳滝(芳滝画)

形状:中判錦絵十枚続(25.0×18.0、25.0×18.0、25.1×17.6、25.0×17.7、25.0×16.9、25.1×17.9、25.1×17.4、25.2×16.4、25.1×17.7、25.1×18.3)

版元:石川和助

上演:明治 5 年(1872)3 月

大阪松島芝居「勝鬨松島新舞台」

描かれているのは右から初代実川延若の男達二葉文七、中村宗十郎の男達相生ノ松五郎、三代目坂東寿太郎の男達月見ノ三五郎、四代目嵐橋三郎の男達花園長吉、尾上松緑の男達老松辰右衛門、四代目嵐璃寛の男達千代崎文七、五代目浅尾友蔵の男達若松権兵衛、三代目中村福助(高砂屋)の男達高砂松三、中村仲助の男達常盤千右衛門、五代目大谷友右衛門の男達雪見ノ庄九郎の十人である。

松島廓は明治 2 年、新町に代わる新しい官許の廓として、木津川と尻無川に挟まれた川口を開発した新

地に誕生した。そこに、同 5 年、人形浄瑠璃の文楽座と歌舞伎の松島座の劇場が造られ、芝居街としても賑わったのである。本作は松島の廓と芝居街の賑わいを背景に、舞台開き「勝鬨松島新舞台」の男達たちを描いている。新しい街を祝う華麗な舞台である。

付 読む歌舞伎 ー絵入根本の世界ー

39

忠臣連理鉢植

絵師：松好斎

形状：半紙本二巻二冊

版行：不明 初版は享和 4 年(1804)

初演：天明 8 年(1788)2 月

大坂大西芝居「義臣伝説切講釈」

本書は「義臣伝忠臣講釈」の「植木屋」といわれる部分である。この時期は劇場側から外題そのまま出版する許可が出なかったため書名を変える必要があった。千崎弥五郎は身分を偽り植木屋に隠れ住んでいる。恋人の腰元お高は敵である高師直の愛妾お蘭の方となり、屋敷の絵図を手に入れるが、真意を知らぬ弥五郎になじられ自害してしまう。挿絵の弥五郎は美男の役者二代目嵐吉三郎、お高は舞台でも得意役としていた二代目沢村国太郎で描かれている。

40

文月恨切子

絵師：北洲(春好斎著【春好斎】)

形状：半紙本三巻四冊

版元：河内屋太助

版行：文化 7 年(1810)か

初演：明和元年(1764)8 月

大坂中の芝居「文月恨切子」

文化 7 年の本書より上演外題そのままの書名で版行することができるようになった。元禄 15 年(1702)に

起こった四ツ橋の殺人事件を下敷きにしているが、この事件はすぐに歌舞伎に取り入れられ、お妻八郎兵衛物として繰り返し上演されていった。本書冒頭一分に載る上方唄「八郎兵衛」は世間で知られた唄であり、歌舞伎でも殺人を盛り上げる演出に使われている。挿絵の八郎兵衛役は当時、美男の立役として人気が高かった二代目嵐吉三郎で描かれている。

41

絵本敵討巖流島

絵師：芦国(狂画堂)

形状：半紙本三巻六冊

版元：松屋善兵衛、鉛屋安兵衛、河内屋太助

版行：天保 6 年(1835) 初版は文化 12 年(1815)

初演：文化 11 年(1814)3 月

大坂中の芝居「復讐二島英勇記」

享和 3 年(1803)序の読本『絵本二島英勇記』を歌舞伎に取り入れたもので、巖流島での宮本武蔵と佐々木小次郎との決闘を敵討に変えている。実父を佐々木巖流に殺害され、宮本家の養子となった友次郎は、養父共々加藤正清に仕官する。正清は友次郎の敵討の覚悟を知り、名を「無三四」と改めるように命じる。挿絵の無三四役は初演の舞台でも同役を演じた三代目中村歌右衛門、正清は実際の舞台では長年共演がなかった二代目嵐吉三郎で描かれている。

42

絵本姉妹達大礎

絵師：芦国(芦国)

形状：半紙本五巻七冊

版元：河内屋太助

版行：文政 2 年(1819)

初演：寛政 7 年(1795)1 月

大坂角の芝居「姉妹達大礎」

享保 3 年(1718)に奥州白石の百姓が武士と口論

の末切り捨てられるという事件が起こった。残された幼い二人の娘たちは苦勞を重ねながらも剣術稽古に励んで、5年後に父の敵を討った。この事件は江戸初演の人形浄瑠璃「碁太平記白石噺」や上方の歌舞伎「姉妹達大礎」に取り入れられて上演を繰り返した。芝居では姉の宮城野が遊女となる設定である。挿絵の宮城野は四代目嵐小六、しのぶは三代目中村松江、敵の志賀台七は初代市川鰻十郎で描かれている。

43

契情稚児淵

絵師：重春（柳斎重春）

形状：半紙本七巻七冊

版元：河内屋太助

版行：天保3年(1832)

初演：天明2年(1782)1月

京都四条北側東芝居「けいせいちごふち稚児淵」

本文前の版元河内屋太助の口上に、本書が初演の作者筒井半二手稿の原本を元になっている旨が記されている。清水寺に捨て子にされた稚児捨若丸は、立身出世のためにわざと殺人の罪を被り、名剣雨竜丸を手に入れる。その後自身が明智光秀の遺児であることを知り、様々な人物になりすまして名宝を手に入れながら国家転覆を謀るが、真柴久次らによって取り戻されてしまう。挿絵の捨若丸役は、舞台でも同役を勤めたことのある三代目中村歌右衛門で描かれている。

44

礮礎花大樹

絵師：北英（春梅斎北英画図）

形状：前後編半紙本十二巻十二冊

版元：前編 松屋善兵衛、鉛屋安兵衛、河内屋太助

後編 河内屋太助

版行：前編 天保6年(1835)

後編 天保7年

初演：寛政4年(1792)2月

大坂角の芝居「礮めいしよすえはなのこのした礎花大樹」

寛政期の上方では、実録体小説『真書太閤記』の流行のもと、豊臣秀吉の太閤記物の歌舞伎が数多く上演された。当時、徳川幕府に禁じられたため実名で上演されることはなかったが、百姓から立身出世を遂げる秀吉の一代記は人気が高かった。挿絵の小田春永（織田信長）は二代目嵐璃寛、此下東吉（掲載の役割番付では「木ノ下藤吉」とほぼ実名）は二代目中村芝翫、早枝犬清（前田利家、幼名犬千代）は初代沢村訥升で描かれ、役名も実名を想起できる変え方である。

※本展で紹介した絵入根本は文化デジタルライブラリーでもご覧いただけます。

▶文化デジタルライブラリー「電子図書」

